

妊産婦の死亡をなくすために

スワプナ・マジュムダール（インド）

準看護助産師のチャンパさんは、インド南部のアーンドラ・プラデーシュ州のアラク渓谷の僻地にあるサバカという部族の小さな村落に行く時はいつも、朝早くに家を出なければなりません。この村落に行くには、車で最も近づける地点で降車したあと、起伏のある丘を 15 キロも歩いて登る必要があるからです。そこでは村中の妊婦の血液検査、尿検査、血圧測定を行い、健康状態をチェックします。特にこの部族の女性には貧血がよく見られるため、異常がないかを確認します。同時に、このような妊婦健診を受ける必要性についての説明も行います。しかし、時には納得してもらうのに 2 時間ほどもかかることがあります。というのも、彼女たちの識字率は非常に低く、迷信や俗説などを信じるあまり、適切なヘルスケアを受けようとする人はいないからです。しかしチャンパさんは、出産のために母親の命が奪われることなど決してないよう、あらゆる努力をする決意で臨んでいます。この地域では妊産婦死亡率および新生児死亡率が高いのですが、質の高い産科ケアおよび産前・産後ケアを受けさせることによって防ぐことが可能だからです。



車が通行できない道での妊婦の移動支援

「数か月前、ある日の午前 1 時に、私が診ている妊婦さんの家族から陣痛が始まったと電話が入りました。彼女にはてんかんの持病があったので、直ちに病院に搬送する必要があったのです。サバカは辺鄙な場所にあるため、私たちのジープは途中までしか乗り入れられず、そこからその家まで徒歩で丘を登り、妊婦さんを抱えて降りました。その後、地域の公立病院に搬送したのですが、その妊婦さんは無事に出産することができました。彼女の命を救うことができて、本当に嬉しく思います」とチャンパさんは語ってくれました。

変化をもたらす

このような事例は、チャンパさんが ASARA プログラムに登録しているからこそ可能であったと言えます。この無料のヘルスケアプログラムは、アーンドラ・プラデーシュ州の 3 つの部族地帯において、予防可能な妊産婦および新生児の死亡を根絶することを目指しており、周縁化された人々のヘルスケアを改善するために活動している NPO のピラマル・スワスティア (Piramal Swasthya) が 2011 年に開始したものです。

この活動の最前線で活躍するのが、チャンパさんのような準看護助産師たちです。森林や急峻な丘を越え、小川を渡り、起伏の激しい道を数キロメートルも歩いて村に駆けつけるのです。このプログラムを通じ、過去 6 年間で、アラク渓谷の遠く離れた村落に暮らす 4,900 人以上の妊婦に援助の手が差し伸べられました。このプログラムによるインターベンション（介入）を行うことで、この地域に生死を分ける違いがもたらされました。この地域の妊産婦死亡率はもともと高く、2011 年時点で出産 10 万件あたり 400 件以上（全国平均は出産 10 万件あたり 215 件）、新生児死亡率は出生 1,000 人あたり 60 人以上（全国平均は出生 1,000 人あたり約 44 人）でした。

これまでの 6 年間、アラク渓谷に点在しているアクセスの困難な 181 の村落においてこのプログラムは実施されてきましたが、過去 2 年間は妊産婦の死亡が報告されていません。さらに、このプログラムによるインターベンションが行われている地域では、医療機関における分娩の割合が 2011 年では 18%であったのに対し、2017 年には 68%にまで増加しています。このような成功を受け、2017 年にはプログラムはさらに拡大されました。

革新が女性を救う

プログラムの第一段階でインターベンションの対象に選ばれた 181 の村落の大半が、アクセスが困難な場所にあるため、革新的な遠隔医療のコンセプトが取り入れられました。これに伴い、訓練を受けた救急隊員が自宅に駆けつけ、産前・産後のケアサービスを行うようになりました。準看護助産師によって名前が登録してあれば、村落の最寄りの遠隔医療センターのジープが妊産婦や授乳中の母親の家に駆けつけ、センターへと搬送します。患者のデータはデジタル化され、妊産婦や新生児の健康状態を把握できるようになっています。また、このデータは公共医療機関で出産する場合にも共有されます。さらに必要に応じて、患者は州都のハイデラバードにあるピラマル・スワスティヤのオフィスで待機している婦人科医とのテレビ会議で、助言を受けることもできます。その後、患者は村落へと送り届けられます。

しかしこのような信頼関係を築くのは、容易なことではありませんでした。女性たちのマインドセットを変えていくためには、時間をかけて揺るぎない決意で取り組むことが必要でした。同じく ASARA プログラムの準看護助産師であるプラミラさんは、自身が妊娠 6 ヶ月の身体であっても、暑さのなか曲りくねった長い道を歩き、ランギニグッダ村落に行くことを思いとどまることはありません。そこで暮らすラクシュミーさんの健康状態をチェックするという目的があるからです。28 歳のラクシュミーさんは、今年の 3 月に第 2 子を出産しました。「私は教養がありませんが、あの時プラミラさんが側にいてくれなかったら、赤ちゃんも私も命を落としていたかも知れないということは分かります」とラクシュミーさんは言います。

彼女の言う通り、もし当時プラミラさんが子癇前症の兆候に気付かなければ、ラクシュミーさんは適切な治療を受けることもなく命を落とし、この話を語ることもなかったかもしれないのです。